コナン短編集

亜紅亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コナン短編集

【Ｎコード】
Ｎ７１６３Ｙ

【作者名】
亜紅亜

【あらすじ】
コナンをはじめ、沢山のキャラクターの物語を書きます
意外なコンビもあるかも…？（＊＾ｏ＾）乂（＾－＾＊）

久しぶりの仲間

俺の名前は中道
隣にいるやつは同じサッカー部の相沢
今日はサッカー部の朝練で夏休みなのに学校へ・・・

中「あっちぃ・・・。こんな暑い日にも練習かよ。たまには休みも欲しいぜ」
相「あぁ・・・。本当だな」
二人が愚痴をこぼしながら歩いていた
そこに・・・

「わぁ～！コナン君やっぱりすごーい！」

どこからか、女の子の声が聞こえた

二人がその声の方へ顔を向けると公園で、サッカーボールを巧みに操っている江戸川コナンと、その仲間。少年探偵団がいた

中「コナンって・・・。前に毛利が連れてきたガキだよな？」
相「あぁ。キッドキラーとしても有名だけど・・・。結構サッカーうめぇんだな」
中「あぁ・・・。でも上手いだけじゃなくて、なんかこう・・・」

二人はコナンの上手さに目を奪われていた
そんな時・・・・

ゴーン　ゴーン・・・

公園の9時を知らせる鐘が鳴った

相中「やっべぇぇぇぇ！」

二人は猛ダッシュで学校へ走っていった

歩「あれ？さっきのお兄さん達、コナン君のことじっと見てたけど行っちゃったね」

コ「あぁ。なんか用事でもあんだろ。」

コ（中道と相沢・・・。サッカーの朝練かぁ・・・。）

そう物思いにふけていると

哀「”俺も幼児化なんてしてなければ”・・・でしょ？」

コ「へっ？！あ・・・いや（こえぇよ！」

～数時間後～

相「っあああぁあ！やっと終わった。今日も疲れたな」

中「あぁ。そーだな」

相「お前ずっと上の空だったよな。まだ引っかかってんのか？」

中「あぁ。誰かに似てたんだけど・・・。っくそ思い出せねえ」

ヒュゥゥー　ボン！

何かが風を切る音がして、何かが何かにあたる音がした

その何かとは

サッカーボールだ
そしてあたったのは中道だ
中「って・・・。誰だよ！蹴った奴は！」
「ごめんなさーい！ちょっとコントロールが狂っちゃった！」
相中「え??」
そう元気に無邪気に言ったのは、一人の少年。
江戸川コナンだ
コ「中道の兄ちゃん、相沢の兄ちゃん久しぶりだね！」
中「あぁ。久しぶりだな。ってお前まだいたのか?」
コ「うん！ちょっと兄ちゃんたちに聞きたいことがあってね」
相「聞きたいこと?」
コ「うん！なんで朝僕のことじっと見てたの??」
中「え。お前気付いてたのか！?あそこからここまで結構距離あるろ！」
あそこからここことは、コナン達がいた公園から、今いる場所。
公園の前の道路を挟んだ道のことだ。
コ「えへへ～。僕気配とか分かっちゃうんだ！」
コ（探偵舐めんな！）
相「へー。お前を見てたのはな！お前があんまりうめぇからよ！目が離せなくなっちまったんだ」
コ「えー本当！新一兄ちゃんに教えてもらってよかったー！誰にも負ける気はしないもん！」
中「工藤・・・?あーーーー！工藤だ！お前の足使い、工藤に似て

だ！」
相「あー言われてみりゃあ。確かに」
コ（ははは・・・結構目ざといじゃねーか）
中「んじゃ誰にも負ける気がしねーんなら俺らと勝負すっか？もちろん手加減なしだぞ！」
コ「うん！やる！」

そうして三人はボールを追い始めた
中道・相沢対コナンだったが、コナンのすばしっこさとコントロールでコナンの圧勝だった
二人は肩を落として帰っていった・・・

～毛利宅～

蘭「あら？コナン君ご機嫌じゃない！何か良いことでもあったの？」
コ「うん！久しぶりに友達と話したんだ！」
蘭「？コナン君毎日のようにプールで学校行ってるでしょ？久しぶりってことも無いんじゃない？」
コ「久しぶりなの！」

そう、サッカー仲間と話したりサッカーするのは久しぶり――

あの時からライバル（前書き）

もしあの後で正体が分かったら・・・・
の小説です

あの時からライバル

「俺の夢が・・・崩れた・・・」

そう気の抜けた声が携帯電話を通して聞こえてきた

～数分前～

「んで？工藤。お前は今月何件解決したんや？」

「あぁ、お前より2件多い5件だよ。東京はぶっそうだなー」

俺、江戸川コナンが話している相手は服部平次

毎度毎度電話をかけてくる。まぁいい話し相手だな

「っくそー！また工藤に負けてもーた。くやしいやっちゃのー」

「っておい。事件は無いほうがいいだろーが・・・・」

そのとき俺はふと、先月の電話で話された”中坊の時の勝負”の話を思い出した

服部は相手を知らないが、俺は知っている

俺、だからな

「おい服部。お前先月言ってた勝負して負けたあ相手。分かんないんだっけ」

「あぁ。名前も言わんで去っていったえぇやつやでー。
どこぞのちっちゃくなった探偵とは大違いや」

「・・・そのえぇ奴、そんなに気に何なら教えてやろーか。服部君」

「ほんまか?!って自分なんでしってんねん。その相手」

平次はいかにも不思議そうな声で聞いた

「知りたい?」

「知りたいゆーとるがな!!!」

コナンは思わず携帯を離した

意気込んだのか、携帯を話してでも十分に聞こえるでかい声が返ってきた

「・・・はぁわーったよ!だからでかい声出すな!!!」

「出されたくないんならはよいわんかい!まさか白馬とか言わんよな?」

「ちげーよ!もっと身近な奴!メディアにも顔出してる…」

「・・・メディアにも?誰じゃ・・・?」

「それはな・・・・」

「それは・・・?」

「工藤新一だよ」

しばらくお互い何も発しなかった
しかしその沈黙に堪えたコナンが沈黙を破った

「・・・おーい？服部？」

「・・・・・」

「びっくりしすぎて声もでねぇってか」

「・・・・んでや」

「あ？」

「何で言ってくれへんねん！このドアホ！！！！！」

「っつ！大声出すなって！
言ってくれって・・・・。喋る隙与えなかったおめーがわりぃんだろ！」

「・・・じゃあリフト止めたんも・・・」

「俺」

「電話で事件解決したんも・・・」

「俺」

「うちのおかんにビデオ見せてもろーたんも・・・」

「俺だよ！しつけぇ！どんだけ疑ってんだよ！！」

「・・・」

「？服部？」

「俺の夢が・・・崩れた・・・」

「ってどんな夢だよ・・・」

コナンは唯あきれるしかなかった

「ただいまーってコナン君、電話中？」

「あっ！うぅんもう終わるよ！じゃあな服部」ピっ

プープープープー・・・

耳に当てている携帯からは規則的な電子音が聞こえるだけだった

その音を聞きながら平次はある言葉を発した

それはー

「俺の・・・ゆめ・・・・」

あの時からライバル（後書き）

１１人目のストライカー公開決定ですねキタ――――（ °∀ °）――――！！！

たのしみっｏ（ж＞▽＜）ｙ ☆

劇が嫌な理由

「ちょーーーっと！待って！何よそのギクシャクした芝居
二人ともしっかりしてよ！」

「「こんな恥ずかしい台詞言えっか！（言えないわよ！）」」

練習に使っている体育館に二人の声が響いた
今は、去年文化祭で中止になった”シャッフルロマンス”の劇を今年の文化祭でまた、やることになった
しかし内容は少し変更されている
そのため、半ば無理やりではあるが練習しているのである

「なによ～。だって去年は中止になっちゃったし…
それで今年やることにしたのよ？それなのに内容が同じってつまらないじゃない！」

「中止になって最後まで出来なかったんだから同じでもいいだろーが」

「この園子様が許すと思う？」

「…いいえ」

「分かってんじゃない♪
じゃあ15分休憩にするから！」

「っか～園子の奴！何で俺が劇なんてやんなくちゃいけねーんだよ！…しかも王子役だし」

その言葉に蘭は反応した

，新一は私と劇をやりたくないのかな，

「ねぇ新「どうせならホームズの劇がよかったな～」

「…」

「ねぇ新一」

「あん？」

「新一は…相手があたしだからやりたくないの？」

「は？」

「だっだって！劇やりたくないんでしょ？
だったら、あたしが嫌なのかなって・・・」

そういった途端、新一が笑い出した
腹を抱えて

「っはははは！
なに、心配そうな顔して言うのかと思ったら…はは！
い…嫌なわけねーじゃん！っはは！ひ～腹いて…っく
ただ…」

「ただ…なによ」

「おめーに劇越しでこんなこと言いたくないだけ」

～後日談～

新一と蘭の掛け合いは成功し、劇は大成功に終わった

俺のヒーロー（前書き）

これは「大坂”３つのＫ”事件のコナンがレイと別れた後のお話です（＊＾▽＾＊）

俺のヒーロー

何でだよ
何で、犯罪なんかに手を染めた
俺はどうしようもならない気持ちに苛まれていた

憧れの選手、レイ・カーティス
レイのお陰で、大好きなサッカーももっと好きになれた
レイのプレイを見るだけで、とてもその時間が楽しくなった
俺はレイのお陰で…

床を何かがぬらした
…雨か？
駄目だ、ぬれる。蘭も心配するから…早く中に…

ここは室内だ
雨なんて降るわけが無い
じゃあ何でーーーーー

涙だ

「ふっ…く……っ」

何の涙か、分からなかった
ただ、涙の原因はレイだ。それだけ

流れる涙をジャケットの袖で拭き無理やり止めた

どこの廊下を歩いて蘭たちの下へ行ったのか覚えてない

何を言われ、話しかけられたのかも

でも、俺の様子から誰も事件のことを聞こうとはしなかった

それが、ありがたかった

でも、悲しくもあった

～服部邸前～

「んじゃ平次！おやすみ」

「おう。毛利のおっちゃんたちも気ぃつけてな！じゃ坊主さっさと風呂入って寝よかー」

平次の言葉にコナンだけではなく蘭たちもびっくりした

「え？服部君。コナン君どうするの？」

「まさかおめー、お前ん家に泊めさせようってんじゃ無いだろうな？」

「ビンゴや！おっちゃん冴えとるなぁ！」

「平次。おばちゃんたち、風邪平気なん？」

「おう！携帯にもう平気ってメールはいっとったわ」

「そうなんだ…じゃあコナン君のことよろしくね！」

コナンの様子を見て平次といたほうがいいと考えたのだろうか
誰も文句を言わなかった

「さ。いこかー」

「……服部」

「なんや？」

「ありがとな」

その声はか細く弱弱しいだった

。・゜・:,。 。・゜・:,。★ 。・゜・:,。 。・゜・:,。☆ 。・゜・:,。 。・゜・:,
。★ 。・゜・:,。 。・゜・:,。☆

平次の部屋には布団が敷かれていた
コナンが寝るように。と

「はあ〜食った食った。もう寝るだけやな」

ボフッ

コナンが敷かれている布団へ身を投げた

「レイ、あの後自首したそうやないか」

「……あぁ」

「俺も傍におったんやけどな、言っとったで。，ファンの皆へ見せていたのは表面上の自分、その仮面を剥がしてくれた少年には感謝しても仕切れないな，って」

「……」

「お前のやったことは間違いちゃうで」

「っ…」

「お前のお陰でレイは救われたんや」

俺は今日、二度目の涙を流した
顔を下に向けていて良かった。服部に見られずにすむ

涙が止まったころに顔を上げた

「悔しかった」

「あん？」

「死体を見た時、もう心のどこかでレイが犯人だって分かってたんだでも…信じたくなかった。信じられなかった」

服部は俺の言う事を黙って聞いてくれた

「あのレイが…犯罪を犯すなんて。裁判でも勝ったんだからもう恨んでなんか無いんだって。
……あの時言ったのは大滝警部達に言ったんじゃなく、自分に言い聞かせてたんだな。」

「あぁ…」
記憶がよみがえる
（あの三人には記者さんを殺す理由は無いと思うよ）

俺も違和感は感じていた
いつもは疑って疑う工藤が三人誰も疑うことが無かった

「大切な人が犯人だって分かったら…真実から目をそらそうとするなんて、探偵失格だな」

泣きそうな声でつぶやいた一言
服部はなんて言うんだろうか
何を言われてもいい。そう思っていたら

「探偵である前に人間やんけ」

「え」

「確かに探偵としては失格なのかもしれへん。でも大切な人を最後まで信じてるって証拠でもあるやろ。信じたくない、捕まって欲しくないっていう気持ちを押し殺してまでも、工藤は真実に目を向けたやんか。それだけで十分やろ。失格なんかあらへんで」

目の前が真っ暗だった
でも、一気に明るくなった
服部のお陰で

「……ありがとな」

「なっなんやねん！そんなに何回も礼を言われると…って寝てんかい！！！！」

コナンは疲れて寝ていた
平次は一人で照れていた

俺のヒーロー（後書き）

文がおかしいきが…

感想お願いします

小さいキューピット（前書き）

これは新一に小さい女の子の親戚がいたら…という妄想です！
お付き合い頂けると嬉しいです（＊^▽^＊）

小さいキューピット

ここは帝丹高校2年B組
新一と蘭の教室だ
今は2時間目が終わり教室は少しざわついている
そのざわつきの中、寝ているのが工藤新一だ

「新一！いつまで寝てるのよ」

蘭が声をかけても無反応である

その時ーーー

「パパ！！！」
「「「パパ？！」」」

クラスの皆が，パパ，と呼んだ少女に目を向けていた
少女はまだ幼稚園児のようだ
その少女が新一に向かって”パパ”と…クラスの皆が驚きの表情だった

「もう！寝てたの？駄目でしょねちゃ！」
「し…紫苑？！お前なんでここに…？てか幼稚園のお迎えに行く予定だったろ？」
「だぁって、ゆきちゃんが行っちゃえばーって…迷惑だったぁ？」

ちなみにゆきちゃんとは有紀子のことだ
有紀子自信がおばさんと呼ばれるのを嫌っており、そう呼ぶように教えたのだ

「はぁ…あのおばさんは何を…」

そこで新一は周りの目が奇妙なものを見る目だということを理解した

「くっ工藤…その子、まさか……お前の…？」
「？あぁ。そうだけど？」
「新一君！あんたって人は…！」
「工藤、マジかよ…」

新一は皆が言う”お前の”が”お前の子供”という意味で言っているとは気付いていなかった

「……新一」

「ん？なんだ？蘭」
「…どんな人なの？」
「へ」

「あんたの奥さんはどんな人かって聞いてるの！！！！」

それはクラス一同が気になっていることだった

「へ？奥さん？」

新一の口から発せられた言葉は間抜けな声だった

「へって…。その子の父親なんだろ？お前？」

「…は？」

「え？」

「……おめぇら…。どう考えたらそうなんだよ？！？！？！？！？！」

新一は軽く怒っていた

「工藤！だってお前”お前の”って聞いたら”そうだ”って」

「そうだよ。おれの親戚の紫苑」

「…親戚？」

「他に何があんだ！えぇ？！」

。・:,。　。・:,。★　。・:,。　。・:,。☆　。・:,。　。・:,
。★　。・:,。　。・:,。☆

「初めまして！工藤紫苑です。新ちゃんとは親戚です！パパじゃないです」

「えと…パパって言ったのは？」

「面白いと思って！」

三時間目はもう始まっている時間だが、園子が先生を言いくるめ、紫苑への質問攻めになっている

…新一は寝ている

「新ちゃんは紫苑がもっと小さいときから可愛がってくれてたんです。遊びに行くと何しててもも紫苑に付き合ってくれたんですよ。優しいんです」

「へー。あの工藤が…」

「小さい子と遊ぶんだ…」

紫苑の目に蘭がとまった

「あの！毛利蘭さんですか？」

「ええ。そうよ」

紫苑はキョロキョロと見て、周りに誰もいないのを確認すると蘭の耳に小さい声で言った

「あのね。紫苑が新ちゃんに好きなこいるの？って聞いたら、こういったんです！」

「え？」

「大好きな奴ならいるな。って。どんな子って聞いたら…

涙もろくてお節介だけど、誰よりも優しくて可愛い。人の気持ちを分かろうとする奴だよ

あいつ以上に俺が好きになる女はいないよ。って。幸せそうにです！」

小さいキューピットが届けた愛のメッセージ

小さいキューピット（後書き）

あ～新一のこの姿アニメで見たいな（〃∇〃）
幸せそうにのろける姿ｗｗ

沈黙の15分～ａｆｔｅｒ～（前書き）

コナンが雪崩を起こそうとしているところからその後の想像を書いています。
蘭の気持ちなどが混じっています。
是非、読んでみて下さいゞ（@。▽。@）ノ

沈黙の15分～ａｆｔｅｒ～

嘘だと思った。
奇跡のように雪崩を起こし、水の流れを止めた少年。
自らが起こした雪崩に巻き込まれ、一時行方が分からなくなった。

雪崩が起きてから、全てがスローモーションに見えた。
コナンが飛び、雪が上から覆いかぶさり、すっぽりとコナンの姿を隠した。

車が停止したと同時に飛び降り、コナンが巻き込まれただろう場所に行った。
あの体の小さい少年を、こんなに大きい雪が隠している。

ーーー見つかるのか？

そんな疑問が脳裏をよぎった。

その疑問を振り払うように、蘭は雪を掘っていった。
ーーー見つかるのか？

「見つけてみせる」
ではなく

「見つける」
に、変えるために。

掘っても掘っても。
探しても探しても。
コナンどころか、コナンのスノボすら見つからない。
想って想って想って、圏外だがコナンの携帯に蘭はかけた。
（お願い…っ。居場所を教えて！！）
思いが届いたのか、携帯がなり居場所が分かった。
しかし携帯が見つかっても、その周辺をくまなく探しても見つからない。

もう、１５分が経ってしまう…！
前に聞いた話を思い出す。
”もう１５分早かったら…”

もう既に１２分経っている。
あと３分…！
このペースじゃ到底無理だ！でも、なんとしてでも見つけ出さなければ…

ふと浮かんだ新一の顔。
コナンと目が合ったときも新一を思い出した。
もう、新一がここにいるとか、いないとかどうでもいい。
コナン君と重なって見えた新一なら何とかしてくれると思った。

震える手で新一を探し、かけた。

…でない。
なんで……こんな大事なときに！

助けて…

助けてっ……！！！！

傍にいるなら…

「助けてよ！新一ぃ！」

願いを込めて叫んだ。
新一に届かないと分かっていながら。

ボンッ!!!

雪の中から飛び出した1つのボール。
サッカーボールだ。

姿を見なくても分かった。コナン君だ。
考えるまもなく駆け寄り、雪を掘った。
見えてきたのは青いウェア、青白いコナンの顔だ。
抱き上げ呼びかける。

しかし、反応が無い。目も堅く閉じられピクリとも動かない。
抱きしめ、暖め、想う。
貴方を想って…

思いが通じたのか、震えながら瞼を上げた。

無事だと安心したが、冷えきっている体を温めるためにすぐにロッジへ戻った。
ロッジでは村を救った英雄として村の人々が出迎えた。
中にはビデオカメラ・携帯を片手にしている人もいた。

「ありがとう！」
「よくやってくれた！」
「この村の救世主や！」

コナンはそんな言葉を背に襲ってきた睡魔を耐えていた。
部屋に着き、布団に寝かされ蘭が額を触り

「コナン君、頑張ったね」

と目じりに涙をためて言ったのを引き金とし、眠りについた。

。・゜゜・。。・゜゜・。★。・゜゜・。。・゜゜・。☆。・゜゜・。。・゜゜・。
。★。・゜゜・。。・゜゜・。☆

後日、コナンがスノボで起こしたことを動画に撮っていたものがいたらしく、動画サイトにアップされた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7163y/

コナン短編集

2012年1月1日23時56分発行